

スカルノの第二次世界大戦論

土 屋 健 治*

Sukarno's Views on World War II

by

Kenji TSUCHIYA

は じ め に

本稿は、流刑地ベンクルー（1938年2月～1942年2月）でスカルノが記した論文のうち第二次世界大戦に関する時事評論を考察する。¹⁾

1930年代後半のインドネシアでは、オランダ植民地政庁に対して独立を要求し非協調主義を唱える政党は次々に解散を命ぜられ、その指導者は相次いで逮捕流刑に処せられていった。合法面に残された政党は、タムリン、アビクスノ、アミル・シャリフディンの指導下で1939年5月各種政党の大同団結を図り7政党の合体組織ガピ（GAPI=Gabungan Politik Indonesia, インドネシア政治同盟）を生み出したが、このガピは指導者間の連合体としての性格が強くその活動もフォルクスラード（国民参議会）を中心とする言論活動にとどまり、多くの民衆を組織することはできなかった。むしろこの時期は、『プジャンガ・バル』（『新しき詩人』）を中心とする文芸運動やタマン・シスワ教育運動の発展が著しくみられた時期であった。そして民衆の多くは、流刑地バンダ島でシャフリルがしみじみと語ったように、「ジョヨボヨ」神話に身をひたしつつ、やがてこの地に日本軍が侵攻しこの地からオランダ人支配者を放逐することを期待していた。²⁾ オランダはヨーロッパで戦争勃発の危機が迫るとともに、ことに1940年5月ナチス・ドイツがオランダ領へ侵入しロンドンに亡命政権を樹立して以来、植民地については現状維持の方針を打ち出すとともに、連合国側への戦争協力をインドネシアに要請してきた。

* 東京大学大学院社会学研究科

1) 本論で第二次世界大戦論というのは、もっぱらヨーロッパ大戦論のことを意味している。アジアと太平洋、ことに日本については、この時期にスカルノはほとんど発言していない。しかし彼の関心の重点は後にも触れるように明らかにアジアにあった。ただそれについては、「スカルノの大東亜戦争論」ともいうべきものを別に考究しなければならないであろう。

2) S. Sjahrir, *Renungan Indonesia*, Djakarta, 1947, pp. 162-163.

ガピはもっぱらこの問題をめぐって討論をくり返した。そして、民主主義擁護の立場からオランダへの協力を表明したが、それはつねにくインドネシアに国会を>という要求と一体になっていた。この国会開設要求をオランダは最後まで受け入れなかった。³⁾ その時、民主主義擁護もウィルヘルミナ女王への忠誠もスローガンにのみ化し、ガピはフォルクスラードで自らそれと知りつつ空話を語りつづけていたのであった。一方、20世紀以来の倫理政策下で生み出された官僚層は、もっとも親オランダ的と目されていたにもかかわらず、激しいオランダ批判を行なった。オランダがインドネシアに対して戦争協力を呼びかける際のスローガンは、「ファシズムに対して民主主義を守れ」というのであったが、それに対して官僚層の最高指導者スタルジヨは、1940年4月「第三国の利益を害している限り、民主か独裁かの区別は事実上なくなる」と述べた。⁴⁾

このような時期に流刑地にいたスカルノはヨーロッパの状況とアジアの状況についてどのような発言をしていたであろうか。本稿の第Ⅰ節ではそれを紹介し第Ⅱ節「まとめ」では、「捕われびと」の言葉でスカルノが語ったその内容について若干の考察を試みたい。

Ⅰ スカルノの第二次世界大戦論

ベンクルー時代のほぼ4年間、スカルノはイスラム問題に関する論文とともに、第二次世界大戦について多くの論文を記している。彼の論文集をみると後者に関する論文は全部で13あり、イスラムに関する論文が1941年に入って減少するのは逆に世界大戦に関する論文は九つにのぼっている。彼のこれらの時事評論をみると、次の3点がその主要な主張としてとりあげられる。第1に現在の戦争はファシズムと民主主義の闘いというイデオロギーの争いではなく、資源獲得の闘いである。第2に、ファシズムは独占段階に入った資本主義の体制的表現である。そしてヒトラーは、その独裁制と滅びつつある資本主義を暴力によって延命させようとする反革命的な役割を演じているから、必ず敗退する。第3にこの戦争を通じて英国がインドに対して独立を賦与するか否かは疑問である。

1940年に執筆した「イデオロギーの闘いではない」では、この第1点と第2点が次のように述べられている。

〔いまヨーロッパで火を吹いている闘いは、イデオロギーの闘い、主義と主義との闘いであると言われている。この衝突は民主主義とファシズムの衝突であり、英仏は民主主義の立場に、ドイツはファシズムの

3) 増田与『インドネシア現代史』中央公論社、1971、pp. 97-104.

4) J. M. Pluvier, *Overzicht van de Ontwikkeling der Nationalistische Beweging in Indonesië in de jaren 1930 tot 1942*, 's-Gravenhage, Bandung, 1953, pp. 146-147.

立場に立つものであると言われている。

たしかに一見したところそうみえる。これは、議会制民主主義を採る民主主義国家と独裁制を採るファシズム国家の戦争であり、東洋においては、日本を除くすべての国々が議会制民主主義を掲げる英仏側に心を寄せているかのように見える。

しかし、少し立ち入って眺めれば、この戦争がイデオロギーとイデオロギーの闘い、主義と主義との闘いではないことは明らかである。……いうまでもなく、この第一義において、思想と思想の戦争、イデオロギーのための戦争というものは存在しない。近代の大戦争は30年戦争であれ80年戦争であれ、また植民地争奪戦争であれ1914-18年の戦争であれ、いずれもその本質本義においては、いずれかの思想を勝利せしめるための戦争、イデオロギーのための戦争ではない。そうではなくてそれは資源 (Kebutuhanmentah) 獲得の欲望がぶつかりあう闘いである。すべての戦争は利益と利益とをめぐっての戦争、利害と利害のまつわる戦争である。1914-18年において、「軍国主義」の攻撃にさらされた「弱少民族の自決権」は、擁護され保護されはしなかった。「人道」が「野蛮」から守られることはなかった。

……現下の戦争の状況を注視して見たまえ。ドイツは自らの主義に奉ずるために闘うのだと言われている。ほんとうにそうなのか。国家社会主義にとってボルシェヴィズム以上に憎悪の対象となるイデオロギーはない。……もちろんヒトラーはしばしば民主主義を攻撃してはいる。しかし彼はボルシェヴィズムと戦うことこそ何よりの願いであるとしている。にもかかわらず実際に生じたことは何か。憎みてあまりある主義に奉じているその当の国と、彼は同盟の締結を求めたのである。一方また、英仏は民主主義を守るために戦争に突入していったと述べている。しかし戦争勃発の前に、数カ月にもわたって英仏の外交官は民主主義の第一の敵との間の友情を希求していた。すなわち共産主義的独裁のソヴィエト・ロシアとの友情を追究していたのである。その件について言えば、議会主義的民主主義と共産主義のイデオロギーが水と油のごときのものであることは、誰もが承知している。……英仏がソヴィエトと同盟した際には、明らかに、イデオロギーはもちこまれはしなかった。またさらに、インドに対してイギリスは民主主義を採用してきただろうか。否である。イデオロギーはイデオロギー、思想は思想にすぎない。国際政治はそれらにかかわるものではない。国際政治はより「生」のものであり、より現実的なものである。

……だから、イデオロギー、主義、思想、これらはすべて戦争をもたらすその根幹を覆うものにはかならない。本質を覆う表皮にはかならない。……

(ところで、民主主義は19世紀の諸産業の自由競争を保障するものとして発生し、それを保障する制度として定着した。しかしいま産業界において自由競争の時代は終わり、独占の大企業が産業の各分野を支配するようになってきた。そしてその独占企業の時代にふさわしい政治制度が必要とされるようになって、ここに独占的性格の新しい政治制度、すなわちファシズムが生まれたのである。だから、民主主義とファシズムとは相互に一つの延長線上にならぶものである。議会制民主主義はまだ成熟していない産業主義のイデオロギーであり、ファシズムはすでに成熟した産業主義のイデオロギーであるから、これらは各々発展の段階を示すものである。英仏では独占がまだ100パーセント達成されていないのにひきかえ、ドイツではすでに100パーセントの独占が達成されているのである。)

(そのような国家同志が) いま、相闘争している。それはもはや民主主義対ファシズムの闘いなどではない。……資源獲得のための闘いである。⁵⁾(なお上記引用文中の()内は引用者による大意の要約である。)

ここで言われている資源獲得をめぐる闘いは、西欧列強によってひきおこされ、西欧の歴史は資本主義発展の歴史である、とスカルノは主張する。「資源獲得のための戦争」は資本主義

5) Sukarno, *Dibawah Bendera Revolusi*, Vol. I, Djakarta, 1959, pp. 361-368.

の自己運動の表出であり、民主主義とファシズムは資本主義（スカルノのいう産業主義）という共通項でくれる。それゆえ上述の第1点、第2点の主張はスカルノにとっては表裏一体をなす。それは、スカルノの関心が西欧世界の全体に向けられていたことを示す。

西欧の全体について、1940年執筆の「*“西欧の没落”*」で、スカルノはシュペングラーの同書の大筋を紹介している。その中で彼は、西欧が没落するというシュペングラーの予言に賛意を表してはいない。逆に西欧にやがて平等な社会が実現され、西欧は新しい歴史の段階に入っていくであろうと述べている。しかし、西欧がいま「病んでいる」という彼（スカルノ）の歴史認識⁶⁾がここで再びくり返し述べられ、新しい秩序がこの動乱の中から生まれることを期待している。スカルノは、この論文の冒頭でコーランの次の一句を引用している。

「また「我々はナザレびとじゃ」と自称する者どもとも我々は契約を結んだが、彼らは（神から）教えて戴いたものの一部をすっかり忘れてしまったので、我らは彼らの間に敵意と憎悪とをかき立てた。復活の日までも続く憎しみを。（その日になったら）アッラー御自ら、彼らがどんな（悪事）をはたらいて来たかを一々彼らに説明してきかせ給うであろう。（コーラン V-14）」⁷⁾

そのあとで、スカルノは「*“西欧の没落”*」に関して次のようにいう。

「ヨーロッパでの大戦は、いまや、ほんとうにはじまった。われわれは、*“ヨーロッパの没落”*に直面することになるのか。

“*Der Untergang des Abendlandes*”（*“西欧の没落”*）とは、シュペングラーの言葉である。……（それによれば、あらゆる歴史は、その頂点をきわめたのちには下降線を辿るといふ。そして死滅する。）……

読者よ、私は西欧が没落するとは信じない。私は、未来について、悲観論の立場に立たない。私は、西欧に対しても世界に対しても悲観主義者ではない。私が信じ、確信していることは、人類はつねに前進を続け、向上し繁栄していくということである。私はまた、その人類が、いくたびかは衰退するが、それが、歴史の終焉を意味しているものだとはいえない。私は、それは、歴史進歩の上での病い、ちょうど、あらゆる母が子を産む時の、その産みの苦しみのようなものであると考えている。……

私を、余りに理想主義者であると言わないでほしい。私はまさに大いに現実的なのであり、私の両の足は現実の大地をしっかりと踏みしめているのである。

（私は西欧は再び発展していくと思う。新たな西欧社会、不平等性のない社会に生まれ変わっていくと考える。冒頭のコーランの引用句はキリスト教世界の没落について予言したのではなくて、それへの敵意と憎しみとが生まれてくることを予言したものである。この予言は正しかった。西欧が神を忘れたところに、それへの報いを受けることとなった。……神の教えに従えば、人と人との間は上下支配の関係はありうべからざることであり、事実原始キリスト教の世界は、そのような世界であった。神はまことに公平ですべてを見通される方であるから、イスラム世界に存在する不平等性をもまた、決してみのがすことはないであろう。してみると、キリスト教世界と同様のこと—没落の徴候—は、イスラム世界においても起こりうることである。ともあれ、私は、西欧にもやがて新しい平等の世界が実現されることを予想しており、そのいみで、シュペングラーの考え方には、反対である。）⁸⁾

6) 例えば彼の1933年執筆の論文、「インドネシア独立の達成のために」(Sukarno, *DBR*, pp. 257-324.)

7) 井筒俊彦訳『コーラン』(上) 岩波文庫, 1964, pp. 147-148.

8) Sukarno, *op. cit.*, pp. 475-481.

その平等性が実現される社会とは、スカルノが、1926年以來主張してきた「経済民主主義」が現に機能している社会である。1941年の「経済民主主義＝社会民主主義と政治的民主主義」、および「ファシズムは没落しつつある資本主義の政治であり行動形態である」の二論文において1933年の論文「インドネシア独立の達成のために」中の所説が再論されている。前者では西歐の諸思想家（ジャン・ジョレス、シャルル・フォーリエ他）の弁説を引用しつつ、議会制民主主義が19世紀の産物であり、プロレタリアートの大量発生とともに、経済的平等性が保障されなくなってきたことを述べている。⁹⁾ また、後者では、「病んだ社会」というイメージが再度あらわれてくる。「ファシズムを愛する者は圧制者の心を持つ者である」と冒頭に述べたあと、スカルノは大要次のように語る。

〔(第一次大戦以前の資本主義は、*“健康”*であったが、それ以後の資本主義は、*“病んだ”*資本主義である。その病いとは資本主義の危機のことである。この危機を恐慌と名付けることができる。それは1921年と1925年にやってきた。若い健康な資本主義は、その一時的な病いに耐えてさらに発展していくが、*“衰退”*に向かう資本主義は年老いた人のように、長期にわたって病みそして完全に回復することはできない。病いは影のように資本主義についてまわる。その病いの根は資本主義それ自身の内にある。若い資本主義は病い癒えて*“健康を取り戻す”*。しかしその病いののちに病いの複合—*conjunctuur*—がやってくる。

*“衰退”*に向かう資本主義においては、ある病いの癒えないうちにすでに次の新しい病いがやってくる。

19世紀半ばより第一次大戦までの資本主義は上昇線を描いていたがそれ以後の資本主義は下降線を描いている。

第一次大戦は、それ以前の資本主義の病いの噴出、その結果であった。……

今日の資本主義は病いから回復する力をもたない。それが今日有しているのはただ *Kekerasan*—(暴力)—のみである。これが、ファシズムの真髄である。ファシズムは資本主義の最後の要塞である。ゆえにそれは反革命である。……)〕¹⁰⁾

ところで、ヨーロッパ戦線の動向についてスカルノは、ナチス・ドイツが敗北すると語っている。1940年執筆の「腹の力」で、ファシズムが独裁制であり、その独裁制の下でヒットラーは天才的な宣伝技術によって、民衆を組織しているが、やがて民衆が自らの飢えに耐えがなくなったとき、民心はヒットラーから離れていくと述べた¹¹⁾ スカルノは、1941年6月のドイツ軍のソ連領侵入の報に衝撃を受け、その直後ただちに6月23日と24日に筆を執っている。「ドイツはロシアと対決し、ロシアはドイツと対決する」がそれであり、その中で次のように述べている。

〔24時間前に、私はヒットラーがスターリンの国に侵入したことをきいた。24カ月前、私は、Ernst Henriの一書を読んだ。24年前、即ち1917年、ロシアの労働者は自らの共和国を樹立した。そのとき、やがてこの共和国が西側からの侵略を受けることは必然であると私は考えていた。だから、今回の事件は私にとつ

9) *ibid.*, pp. 579–588.

10) *ibid.*, pp. 589–604.

11) *ibid.*, pp. 357–360.

ては何も「新しい事態」などではない。しかし、今回の事態で、この戦争は決定的に重要な段落に入ったのである。……

(ヒットラーはここに2億の人々を敵とすることになった。これは巨大な敵である。ヒットラーを去勢する唯一の敵である。それはナポレオンのロシア侵攻とその結末とを想起せしめるものである。またこれは、巨大な軍と巨大な人民とを敵に回したことを意味するものである。それについて Ernst Henri はこう述べている。いつか大量の宣伝ビラがドイツ上空から撤かれ、ドイツ人民との連帯を呼びかけるであろう。ドイツ人民と婦人は解放と平和を要求するだろう。1917年と1918年におきたことと同じことがおきるであろう。これはドイツでの内戦を呼びおこす。これだけがヒットラーを打倒する唯一の戦略である。ヒットラーはゲシュタポを持って内外の敵を摘発している。しかし、ドイツ国内が一大刑務所と化しても民衆の火の噴出を押えることはできない。地下組織と地下抵抗運動がおきてくる。)

ヒットラー対スターリン、スターリン対ヒットラー。おそらく世界史は、いまわれわれが体験しているこの闘いほど巨大な闘いがかつて体験したことはなかったであろう。絶対主義の独裁者が、プロレタリアートの独裁者に戦いを挑んでいるのである。

(Ernst Henri は両者の闘いを五つの段階に分けて説明している。第1段階はヒットラーが優勢である。第2段階はスターリンが逆襲する。第3段階はスターリンの軍がドイツに攻め込む。第4段階は反ファシズム大衆地下抵抗組織の活動が熾烈となる。第5段階はヒットラーが最終的にとどめをさされ、ファシズムは崩壊する。)

これが Ernst Henri の指摘である。これは正しいか否かそれは神のみぞ知る。ただ社会の諸法則を知る者にとって、ファシズムが粉碎されることは明らかである。その内部の力によって。また、どこか知らぬが、英仏か米か、いずれか知らぬが外からの力によって。ただそれは必ず、いやおうなしに崩壊する。太陽がやがて夜を迎えるように、ファシズムは崩壊するのである。]¹²⁾

1941年秋に執筆した「ファシズムとの苦難の闘い」では、先の「腹の力」および上に紹介した論文の延長として、ナチス権力が内部崩壊していく可能性を、Ernst Henri の説を再度紹介しつつ、述べている。¹³⁾

それでは、インドネシア自身がファシズムに反対するのは何故か。それについてスカルノは、「インドネシアはファシズムと対決する」(1940年)において次のように述べている。

〔(インドネシアの精神は、民主主義(民衆主義)の精神である。そして、ファシズムの精神は、反民主主義の精神である。インドネシアの精神は、アダット—ミナンカバウを見よ。ジャワ村落の合議をみよ。一に従う精神で、それは、`ムファカット`と`ムシャワラ`を愛好するものである。そして、イスラム教によっても、`ムファカット`と`ムシャワラ`は教え導かれている。……しかるに、ファシズムの精神は、一切のことがらをただひとりの欲望に委ねてしまうもの、`個人`の精神に委ねてしまうものである。……インドネシアの民衆のアダット、われわれの魂とファシズムとは対立するものである。)

それについてハッタはこう述べている。「もちろん、西欧デモクラシーは、インドネシアに解放をもたらさしめない。では、ファシズムはそれをもたらすであろうか。それが何をもたらすかは、われわれが等しく承知しているところである。)]¹⁴⁾

一方、スカルノは、ヨーロッパの民主主義諸国(連合国)それ自身について、どのように語

12) *ibid.*, pp. 515–520.

13) *ibid.*, pp. 547–560.

14) *ibid.*, pp. 457–473.

っているであろうか。彼がとりあげるのは、イギリスである。そこで彼は、連合国がやがてヒトラーを打ち破ることを予想する諸論文を紹介する一方、英国がインド民衆の支持を取りつけることに対して、かなり懐疑的である。1941年8月10日という執筆記日のある「あと10億の味方」では、連合国側がインド、中国合わせて8億の民衆を味方にしうるというのに対して、ネルーをはじめとするインド民族運動の指導者の言葉を引用して、インドの独立が保障されない限りイギリスへの協力はなされえないと述べている。¹⁵⁾ それではインド自身に立ち返って、インドはその独立を組織する条件を有しているであろうか。

それについてスカルノは「イギリスはインドを独立させるか」(1941年)の中で、インドの独立に反対する者がその反対論の根拠として、インド人自身の自活統治能力の欠如と、独立維持能力(防衛力)の欠如という2点を指摘するのに対して、インドが第1点において、すでに十分な能力をイギリス到来の以前から有していたと主張している。¹⁶⁾ その次に記された、「インド独立をめぐる——インドは侵略を撃退しうるか」においては、第2点のインドの防衛能力はきわめて高いものであると、次のように述べている。

〔まず第一にインドの位置をみてみよう。インドを例えば強国のドイツや日本と比較してみると、ドイツ、日本よりも戦略的には10倍も強い。ドイツは陸続きで前後左右敵に囲繞されている。日本は太平洋によって防衛されているだけである。いついかなる時でも、日本は、西、北、南からより強い敵に攻撃される。もちろんドイツは強く日本も強い。だが連合国のABCDの共同戦線はやがてドイツと日本を破砕することであろう。しかるにインドを見給え。その北側、北西、北東を、インドは山嶺天をつく鋼鉄の柵によって防衛されている。ただカイバル峠だけが唯一の通路であるがここを防衛するのは、きわめて容易なことである。インドのもう一方の境界は、インド洋の大海である。その大海は何千キロにわたって島影もなく、ここから攻撃するのは至難のことである。

このようにインドの土地は戦略的に強固な土地である。それでは、人はどうであろうか。インドには35000万の人がいる。それはロシアの2倍、ドイツ・日本の2倍、英仏の6倍以上の数である。そのうち15000万人は、現に活動力に溢れ戦闘に耐えうる20-40才の男子人口である。このような強固な“兵士の館”をもつ国は、中国をおいてほかになくインドの強さはここにきわまる。

そこで次の問題はこの軍隊の質である。その“闘志”の問題である。

たしかに、インドの民衆は、ヨーロッパ諸国の民衆よりは平和を愛好する。またインド人民は、蚊を殺すのさえ躊躇する人民であると言われている。しかし、その平和を愛する民衆が、ひとたびその国を攻撃され、独立を脅かされ、宗教を攻撃された時には、決死の闘いを遂行しうることを、世界史は教えている。そのような民族は、聖なる命令のゆえに闘うのである。また、物質的な力の源泉によってではなく、道義的な力の源泉によって、あえて死と立ちむかう用意をしているのである。インドはそのような“道義の館”であり、道義の力に溢れた館である。何とその道義の力は強固なものであろうか。……

またインドは戦闘の際の知的能力においてもすぐれている。海軍力においても、かつてのインドは広いインド洋を駆けめぐり、現在世界第三の海軍国となっている日本をはるかに凌いでいたのである。

15) *ibid.*, pp. 541-546.

16) *ibid.*, pp. 561-568.

一方、「資源の乏しさ」を云々するならば、日本もイタリアもトルコもギリシャもオランダも軍事強国とはなれないはずである。しかるにそもそもインドは資源の豊かな国である。

インドの独立問題について、インド人スリニヴァサ・イェルガルは1926年に次のように述べている。

「インドが独立しえない理由はひとつとしてない。日本がすでに自立したようにインドもまた独立し、独歩独行することができる。」

これが、男らしい声、インド民衆の胸の底からほとぼり出てくる男の声である。このような声を発しうる民衆は、何としあわせなことであろうか。〕¹⁷⁾

II ま と め

(1) 西歐世界への「間接話法」

ベンクルー時代のスカルノは多くのイスラム論を記した。それらのイスラム論はインドネシアとトルコのイスラム運動に託して、スカルノの民族主義的立場を直接的に主張した。第二次世界大戦に関連して同時期に記された種々の時事評論は、それに対して「間接話法」の表現をとっている。

ここで「間接話法」というのは、形式としていえばそれらの評論のほとんどが「この問題について彼はこう語っている」という体裁ででき上がっていることを意味する。ファシズムの世界史的意味、ヒットラー敗退への道、インドの対連合軍協力とその独立問題等について、スカルノはその評論の大部分を引用で埋めている。しかしこのような「間接話法」はスカルノの大戦論に限って特に顕著なわけではない。1926年の論文以来、彼の論文には<西歐思想展示主義>とも言うべき、あれこれの書物からの引用紹介が著しい特徴としてみられる。(1930年の「法廷弁説」ではそれがことに著しい。)それゆえここであらためて「間接話法」を云々することは当を得ていないかも知れない。しかし大戦論では、それ以前のものとは異なって「間接話法」の中にスカルノ自身は没しており、多種多量な引用文の合い間から彼の饒舌(熱っぽい主張)がほとぼり出ることはない。スカルノの緊張した心境を伝えるのは、わずかにヒットラーがソ連邦に侵入した時点で書かれた論文のみである。それ以外は饒舌とみられる部分も1930年代初頭の主張が繰り返されているにすぎない。

インドネシアのイスラム社会の後進性を論ずる際の切迫した口調とはちがって、スカルノの大戦論にはヨーロッパ大戦という舞台を客席で眺めている趣きがある。それが「間接話法」の内容である。

それでは、彼はなぜ特にヨーロッパの戦争について「間接話法」で語りつづけたのか。

いうまでもなく、スカルノがヨーロッパ戦線の状況と動向についてあれこれ眺めやっていた

17) *ibid.*, pp. 569-577.

時期、インドネシアをめぐる国際状況は日ごとに切迫していた。植民地政庁は、民族運動が日本と結びつくのを警戒し、1941年1月にはタムリン、スティアブディ（ダウエスデッケル）らを逮捕した。タムリン逮捕の背景には、彼が日本人との親交を深めていたことと並んでオランダの敗退を新聞紙上に掲載しようとしたことがあった¹⁸⁾ように、ヨーロッパ戦線でのオランダの敗走と東亜における日本への親近感について公然と語ることは禁句であった。

それにもかかわらず、バンクルー時代ラジオ放送に耳を傾けつつアジアでの戦火が目前に迫っているのを感じていた¹⁹⁾ スカルノは、何らかの形で彼の年来の主張、久しく封じられていた<インドネシア独立>というその主張を時事評論を通して述べようとした。

第二次世界大戦勃発当時、オランダはガピの決議文中にみられる自治政府設立の要求の中に、オランダの国家的危機につけこみ、かつ国際的状況を利用してこれを巧みに民族運動に有利に用いようとする脅迫的要素を感じていた。²⁰⁾ インドネシアにおいても、スカルノの最大の教師チプト・マングクスモは流刑地バンダ島から、民主主義の危急存亡の時にオランダに対して独立の要求を突きつけることは、結局民主主義の敵を制することになり、そのような脅迫は武士（クシャトリア）の道に反するものであると主張して、彼自身民主主義擁護の立場から、その年来のスローガン「民族独立」をおろしてしまった。²¹⁾

しかしスカルノの民族主義的立場からいえば、「独立を要求することがファシズムに手を貸すことである」ということこそ「脅迫」にはほかならなかった。さらに、ヨーロッパで危い立場にあるオランダの弱みを衝くことが脅迫であるならば、そのような脅迫こそ植民地民族の主体的立場を表明するものであった。

“Sana mau sana, sini mau sini”（“あそこはあそこを欲し、ここはここを欲する”）というスカルノの年来の主張からすれば、“sana”（“あそこ”）は彼岸の世界でしかない。現在のヨーロッパでの戦争は、たしかに「ファシズムと民主主義の闘い」という様相を呈している。しかしファシズム 対民主主義の対立も彼岸の世界の対立でしかない。“sini”（“ここ”）とのかかわり合いで言えば、その対立もことの本質においては、資本主義諸国間の資源獲得をめぐる闘いとなるのである。「この戦争はイデオロギーの戦争ではない」という言葉には、そのような意味がこめられているのであろう。

スカルノがそう言った時、倫理政策の嫡子である植民地官僚（スタルジョ）とその鬼子であ

18) 増田与 前掲書, pp. 100-103.

19) 谷口五郎『スカルノ一嵐の中を行く』朝日新聞社, 1966, p. 81.

なお『自伝』中にもラジオの件がでてくる。(スカルノ, 黒田春海訳『スカルノ自伝』角川文庫, 1969, p. 187)

20) J. Pluvier, *op. cit.*, p. 139.

21) *ibid.*, p. 167.

った独立運動の闘士とは、ここにほぼ一世代を経て相交わることになる。

先に「間接話法」と述べたのは、スカルノにとって“あそこ”の出来事がしょせん彼岸の世界での出来事にすぎなかったということを示している。

また、スカルノが「ファシズムは刀である。その刀がいまヨーロッパを切り裂いている」²²⁾という時、彼にとっての第一の関心事は、その刀が邪剣であるということよりも、刀の切れ味そのものではなかったであろうか。もちろんそれは邪剣であると彼は言う。しかしその邪剣を破るのは、民主主義諸国家であるよりも、スカルノの「マルクス主義」的側面の立場からみて、植民地民衆の希望の灯となっていたソ連邦2億の民衆とドイツ自身の民衆の力である。そして刀と刀の切り結ぶ中からヨーロッパに新しい秩序が生み出されてくると彼は考えるのである。西欧世界が「病んでいる」という1933年以來のスカルノの歴史観が、そこでは再度新たな意味をおびて、表現されることになるのである。

(2) アジアについて

スカルノは流刑地で最後までオランダ協力の姿勢を示さなかった。1941年春植民地顧問官パイペル(Pijper)に、「親オランダ的論文を記せば、ジャワへの帰還を許そう」と懇請された時にスカルノが答えたのは「私はこの誘いの事実をインドネシア民族運動に向かって知らせよう。そしてブン・カルノの立場を明らかにしよう」ということだけであった。²³⁾

スカルノが客席に身を置いて“あそこ”の舞台の移り変りを眺め、ときにコーランを引用し、ときにジンギス汗について語りつつ²⁴⁾屈折した形で彼の民族主義的立場を表明していた時に、彼の最大の関心が太平洋をとりまくアジアの動向、ことに日本帝国の動向にあったことは、いうまでもない。

スカルノの太平洋への関心は1926年～29年当時幾度か語られていた。その中で太平洋で戦争が勃発する可能性について、1928年にこう述べていた。

〔……われわれは汎アジア主義に立つ。なぜならばこの時代はやがてわれわれをしてアメリカ、日本、イギリス等の帝国主義の巨人たちが、餌食を求め権力を求めて相闘い、太平洋で死闘をくりひろげることになる状況の目撃者たらしめるであろうからである。この時代は、やがてわれわれを太平洋に逆巻く大暴風雨の波浪のただ中へと運んでいくであろう。すでにいま風のとどろきが聞こえ始めている。欲する時にはいつでも飛びかかろうと自らの牙をむきだしにした獅子のように、また敵を丸呑みにせんとして多くの口

22) Sukarno, *op. cit.*, p. 472.

23) Bernhard Dahm, *SUKARNO and the Struggle for Indonesian Independence*, Cornell Univ. Press, 1969, p. 213.

24) スカルノは1941年に「アジアの大帝国主義者ジンギス汗」を記し、その中でジンギス汗がヒトラーはもちろんのこと、西欧のいかなる英雄も及びがつかない史上最大の帝国主義者であったと述べている。(Sukarno, *op. cit.*, pp. 605-610.)

を開いている巨人ダサムコ（ワヤンの登場人物）のように、五つの拠点、すなわち、ダッチ・ハーバー、ハワイ、ツツイラ、ガム、マニラから、アメリカは強固不拔の海の要塞を築いて日本を包囲している。そして日本もまた、シンガポールに要塞を築いたイギリスに従って、自らの武器を磨ぎすましている。

その太平洋のへりに位置しているわが国は、それらの巨人の闘争に巻き込まれるのではあるまいか。それゆえいまからすでにわれわれはそれへの準備をしておかなければならないのではないか。やがて太平洋戦争が太平洋で燃え上がったとしても、驚かないようにしてほしい。やがてわれわれの敵同志がわが国の近辺で、あるいはわが国土自身で死闘をくりひろげたとしても、それへの準備ができていないということのないようにしたい。アジアの他の諸民族が相互に結合しつつ、この激動の中で自らの態度をいかに決すべきかを知らなかったのにひきかえ、われわれが自らの態度について無知でないようにしたいものである。]²⁵⁾

後年「自伝」の中でスカルノは、上記の論文を1941年7月に記したと述べている²⁶⁾が、これは明らかに彼の記憶ちがいである。そしてそのまちがいは、当時の彼が太平洋での戦争勃発にいかに関心を払っていたかを逆に物語るものである。その「自伝」ではすぐ後に続けて「私の希望や夢を一気にもたらずであろうと結論づけたこの戦争」²⁷⁾と言っている。「希望や夢」とは独立の別表現にほかならない。ただ、その戦争の勃発がインドネシアの独立とどのように関連するのかは、1928年の論文の中では明解に語られてはいない。1930年の法廷弁説でも彼は太平洋での戦争勃発の可能性について語っている。²⁸⁾そこでは彼は、戦争がおきた時、いかなる武器も手にしていないインドネシア民族がどうして独立を奪還しえようか、と述べている。これは、1930年に国民党が蜂起しようとして謀議をめぐるしたという政庁の訴状に対するスカルノの弁明である。

25) *ibid.*, p. 77.

ただし、インドネシアにおいて太平洋戦争勃発の可能性についてもっとも早く触れたのはタン・マラカであろう。彼は1925年に後のスカルノの下敷きをなす彼の見解を『インドネシア共和国をめざして』の中で次のように述べている。

「……二つの帝国主義諸国間の政治的経済的対立が新たな戦争をひきおこすことは否定しえない。……極東においても日本はさまざまな帝国主義者との競争をますます激化させている。日本は自ら英米連合によって脅かされていると感じ、そのため最強の敵“ソビエト”にかかえこまれてしまった。資本主義諸国の対立は、ヨーロッパとアジアとを問わず、いつでも新しい戦争を惹起せしめるものである。シンガポールの要塞はいま保守的な英国政府によって建設されている。また、米日戦争に対処するため英米蘭の共同行動の緊密化をめざして太平洋では共同演習が行なわれている。日本の急速な陸海軍の拡充は、今次の世界大戦よりもさらに巨大で戦慄すべき太平洋での新たな世界大戦争がありうることをますます確信させるものである。……」

（帝国主義諸国の内で、アメリカと日本は共同協調する要素を持ちえない。明日か明後日かこの二つの帝国主義国は剣をとって太平洋でその力を決せずにはおかない。しかし日米戦争がいつ起こるかは、誰にも言えないことである。）……

インドネシアにとっても、次のことはまだ即答することはできない。すなわち太平洋戦争において独立を追求する好機を得ることができるか否かということに対しては即答はできない。」

(Tan Malaka, *Menuju Republik Indonesia*, Kantong, 1925, p. 18, pp. 58-60.)

この中でタン・マラカは、さらに戦争の渦中で権力の真空状態ともいべきものが発生することと、シンガポール、オーストラリアの「連合国防衛線」が整備されたら、インドネシアの独立は困難になることを予想している。いかにも透徹した見通しということができよう。

26) スカルノ（黒田訳）前掲書、p. 193.

27) *ibid.*, p. 194.

28) Sukarno, “Indonesia Menggugat,” (*Kepada Bangsa*) 1930, pp. 231-246.

それから10年以上経過したがインドネシア民族の手中には依然として武器はない。しかし太平洋での戦争が必ず勃発しインドネシアを巻き込むであろうとスカルノは信じてつづけていた。その時インドネシアは独立の絶好の機会を得ることになる。ベンクルーでスカルノがインドについてその防衛力を分析し、インドはその独立を全うしようと記した時、それはそのままインドネシアの土地と人間を頭に描いていたことにほかならない。

後年対オランダ独立戦争のさ中にタン・マラカは『ゲルポレック』を著わし、独立戦争はインドネシアの自然（アラム、人間と社会を含む）とオランダという近代との闘争であると記している。²⁹⁾

スカルノもまた、西欧近代が構築した世界秩序が内部崩壊し、植民地諸民族がいかなる形においてかは定かでないにせよ西欧近代に向けて総反乱を開始するその契機として第二次世界大戦を考えていたのである。

29) Tan Malaka, *Gerpolek*, 1948.